

平成 27 年度 第 1 回景観審議会 発言要旨

会 長	昨年、10 年ぶりに旭川市景観賞を選んだが、受賞した「市民活動交流センター CoCoDe」と「旭川駅」は、北彩都あさひかわにある施設である。 CoCoDe や旭川駅、あるいは北彩都あさひかわ内に今、次々と建設されている新しい建物も、当然この景観計画の様々なルールにのっとって造られている訳で、そういう取組みも、今回の都市景観大賞※の受賞の理由のひとつだと思う。
委 員	私は、景観については過去に研究所の立場でいろいろと携わってきた。 「北彩都あさひかわ」が都市景観大賞を受賞したということだが、目に見える部分の美しさといったものは当然評価されていると思う。一方、その裏で「北彩都あさひかわまちづくり推進会議」のようなものがないと、なかなか統一的にいろいろな事業を進められなかったのだと思う。 あの場所を見るだけでは、裏でどういうことが行われていて、どういう思いでつくられていったかがなかなか見えてこない。 しかし、景観は目に見える部分だけではなくて、その裏にあるいろんな動きや、人の思いといったものを総合的に表現して伝えていかなければならないのではないかと思う。したがって、こういう審議会でも、計画自体も含めて人の営みを評価するという視点が必要ではないか。 また、「褒める」ということが大事だと思っている。景観整備やまちづくり活動は、褒められるためにやっている訳ではないが、ある意味、評価されるということが次の力になるということもある。したがって、旭川市の景観賞事業も臆することなく、検証すべきものがあるのであればどんどんやったほうがいいと思う。
会 長	景観とは、目に見える形が美しいということもさることながら、その裏にあるまちの環境や子ども達の安全といった様々なこととも強くつながっていることだと思う。私たちも、景観を見るときにはその裏側まで見るという視点が大切である。
委 員	景観のための景観づくりというよりは、何かをきっかけにして自分の住む地域を真剣に見ることで、結果として景観づくりにつながることもある。 また、神楽岡通線のプラタナス並木は、環状線を挟んで見え方が違ってくる。神楽岡公園から環状線にぶつかるまでは緑のトンネルと言われる自然樹形のままのプラタナスがあるが、それ以降は緑の量が明らかに少ない。それは剪定の仕方が違うからだ。環状線のところまでは住民たちが枯れ葉の処理を町内会でやるということになっているが、それ以外の部分では枯れ葉の苦情がとて多いので、道路管理者は剪定するときに大量の葉を落とす。それが緑の豊かさを損なっている。結局は住民が緑を減らしていると言える。町内会が枯れ葉の処理を自分たちですることで自然樹形が保たれて、それで環状線までは美しい緑のトンネルができている。あの美しい緑のトンネルの裏に、住民の方たちの気持ちや行為があるということが素晴らしいと思う。

会 長	この時期、神楽岡通線のプラタナス並木は完全に緑のトンネルになっている。一方で落ち葉の問題などでは住民に負担をかけることもあるが、そこをどう考えるかだろう。当事者ではないので第三者的な言い方になるが、もう少し緑があることのメリットとか価値とかいうものについて、市民全体が認識を深めてもらえると良いと思っている。 買物公園では、特に6条から8条あたりのシナノキがかなり大きくなって緑が整ってきている。植えた当初は小さな緑だったが、最近は豊かになってきて、木陰の下で市場やビアガーデンを開いたりすると、木があるのとないのとでは通りの雰囲気が全然違うことを実感する。
委 員	今、商店街で道路占用許可を取ってオープンカフェを設置しているが、風が抜けてとても気持ちの良い空間になっている。
会 長	7条緑道も、再整備で街路樹の枝を切った当初は批判もあったが、今見るとなかなかすっきりとしていい緑空間になっていると私は思う。 それから、平成9年に制定した「旭川八景」についてだが、この中には一つ異色なものとして、冬の自然現象である「ダイヤモンドダスト」が入っている。そういったものも景観の重要な要素だということだ。 旭川八景を制定して20年近く経っているが、その間に旭川駅周辺などの開発により、いい景観としてピックアップできるものが増えている。そこで提案だが、例えば、葛飾北斎の「富嶽三十六景」にならって、「旭川の四季 三十六景」と銘打って、季節ごとに9つずつ、36の景観を選ぶ施策を試みてはどうか。 景観というのは、季節と場所のマトリックスによるものだと思うが、その考えで整理すると、旭川の景観上の魅力が浮き彫りになるのではないかな。
委 員	四季それぞれで美しいところもあるし、同じ場所で四季を通していいところもある。
会 長	同じ場所が違う季節で選ばれても構わないと思う。季節の変化が感じられることを美しいと思うこともある。 景観賞は数年に1回の開催なので、その合間にそういったことができないかと考えた。
委 員	大きな樹木を育てるためには大きな空地が必要であるが、都市の中でそういった場所はどのようなところか調べてみると、公共施設、学校、公営住宅といったところにある。公共施設では植栽を行っているが、シンボリックな樹木をもっと積極的に植えてもいいと思う。 東川町で毎年「写真甲子園」が行われているが、事業を通して町の外の人に、自分たちのまちの良いところを探してもらっているのだらうと思う。外の人たちの視点を、積極的に景観づくりにも活用していけると良い。 植樹枿の花壇づくりは、住民活動として盛んに行われているし、それ自体は素晴ら

	しいことだが、花の色の組み合わせはもっと工夫できないだろうか。
委 員	住民が植えている花は、市でも助成しているものである。私も、今よく見られる原色の組み合わせはあまりいいとは思わない。同じ花でも、いろいろな色があるので、配色を変えることを提案するのだが、結局は毎年、赤や黄色の組み合わせになってしまう。 昨年、「花きの振興に関する法律」が制定されて、まちづくりに花を使い、学校教育にも取り入れようということになったので、景観づくりの中で、もう少し花を利用してもらって、かつ、市民の方にきちんと提供できる仕組みができていくといいと思う。 以前は「花フェスタ」で、町内会などでつくる花壇を表彰していたが昨年で終了してしまった。今、町内会で一生懸命やっている人たちが評価してもらえなくなってしまうが、花壇づくりもひとつの景観なので、どんどん伸ばしていけるとよい。
会 長	札幌に行くと、歩道の真ん中に巨木があって、その周りを回って歩道を造ったりしているが、そういう感覚が大事だと思う。日ごろからいいと思っていた大木がある日突然切られてしまうことがある。安全上の問題もあるのだろうが、一方でランドマーク的な意味合いがあった樹木がなくなるのは寂しいものだ。北彩都あさひかわでも、CoCoDeの近くにあるヤマナラシの木を、景観重要樹木の指定の対象となるものとして景観計画に掲載している。巨木になるには100年単位の時間が必要で、一度無くなると100年待たなければならない。巨木を大事にする感覚が、一般的になるようになると良い。
委 員	旭川でも、そういった樹木を紹介したチラスがある。また、木を切らないで道路を曲げた場所もある。
委 員	学校の校庭に巨木が育っていることがあるが、学校を建て替えるときにたいいていグラウンド側に新校舎を建てて、元、校舎があったところをグラウンドにするので、立て替えのたびに木を切る場合が多い。そういったことも、計画の工夫で何とかできることだと思う。校舎が変っても、自分が通っていたころの木が残っているといのは素晴らしいことだと思う。
委 員	景観計画の中で、北彩都あさひかわ地区には忠別川の河川敷が含まれているが、河川敷は国が所管している場所なので、市が関与することはできないのではないかな。 また、この地域の冬の景観に関わることで、除雪についてはどのような考えなのか。
事務局	河川敷については国が管理する部分ではあるが、北彩都あさひかわ地区のまちづくりの考え方として、川の自然を大切にするという目標があるので区域に入れている。また、河川敷で建築行為等が行われることはあまりないと思うが、その場合には景観計画に定める行為の制限がかかる。 除雪については所管が違うのではっきりとしたことは言えないが、北彩都あさひかわ地区では、シビックコア地区を発着点として駅南広場の方を回る、歩くスキーのコ

	ースを常設しているので、この辺りを完全に除雪してしまうことは考えにくい。
委 員	私はボランティアで、宮前公園の生態階段の植栽をしたのだが、参加者が少ない。外来種が増えると地場の植物は負けてしまうので、守っていかなければならない。 それから、上川神社の敷地から見る景観がとても良いと思っている。北彩都あさひかわが完成して建物が建ったらさらに眺めが良くなると思うが、神社の裏の丘の木が切られて建物が建つようなことがないか心配である。神社の敷地は市の管轄外なのか。
事務局	旭川市景観計画では市域全域が景観計画区域に入っているので、神社に限らず、他の建物でも、届出の対象となる行為については制限がかかることになる。
会 長	神楽岡公園には開拓前からの原始林が残っているということだ。街の中にある公園だけに本当に貴重な林だと思う。そういう存在をきちんと発掘して、市民の方に知らせる機会がもっとできると良い。景観賞の選考などを行っても、それを多くの人に知ってもらわないと意味がない。今後もそういう取組みを地道に行うことが大事である。 フィンランドでは、子ども向けの良い景観について具体的に解説した教科書があって、それを学校で勉強する。子どものときから良い環境の中で生活できるということがどういうことか、学校教育や家庭での会話の中などで子どもに伝えていくことも大事である。

※都市景観大賞・・・良好な都市景観を生み出す優れた事例を選定し、その実現に貢献した関係者を顕彰するもので、「都市景観の日」実行委員会が主催。平成２７年度の都市景観大賞「都市空間部門」の大賞（国土交通大臣賞）を北彩都あさひかわ地区が受賞した。